

ナイルとファラオの夢の跡 感動のエジプト紀行8日間

三日目はルクソールからアスワンに向かい、途中エドフのホルス神殿
コムオンボでコムオンボ神殿を見学する。そしてアスワンでは切りかけ
のオベリスクとアスワンハイダムを見学する予定。

1 よく分からないイスラムの教え

朝は人々に礼拝を知らせる「アザーン」の祈りで目を覚ました、確か5.00頃でイス
ラム教では礼拝をサラートといい夜明け、正午、午後、日没、夜半の1日5回メッカ
のカーバ神殿の方角に向かって祈りをささげる。礼拝は目に見えないアラーとのつな
がりやを常に意識するための重要な手段で、パイロットなどの人命を預かる仕事をして
いる時や、旅行中などは前か後にまとめてすることが許されているという。
イスラムは実践する宗教といわれ、その特徴はアラーの定めた運命の6つを信じ、次
の5つの信仰の柱を実践することにあるという。

シャハーダ(信仰告白)

「アラーのほかには神なし、ムハンマドはその使徒である」と唱えること

サラート(礼拝)

夜明け、正午、午後、日没、夜半の1日5回祈りをささげること

ザカート(喜捨)

財産や商品に課せられる一種の公共福祉税。孤児や寡婦への救済、貧者への喜捨

ラマダーン(断食)

イスラム暦の第9月の1ヶ月間、日中の一切の飲食を断つこと。子供や病人、旅
行中の人は免除される

ハッジ(巡礼)

メッカへの巡礼を指す、健康で財力のある人は一生に一度は果たすべきとされる
この五つの中で 断食は何の為に行うのか意味がよく分からない、そして、生活
習慣でよく知られているのは豚肉と飲酒の禁止。男性が髭をはやしているのはムハン
マドが髭をはやしていたことと関係があるとか。女性のベールについてはイスラム発
祥以前からあり、コーランの「夫以外の男性に肌を見せてはならない」ということか
ら、敬虔な信者がベールを着用するようになった。しかし、今回の旅で見た女性の姿
はといえば様々であった。ほんとに目だけしかだしてないベールの女性はほんのわ
ずかしか見なかった。大半は顔はすべて見えるベール姿でカイロのような都会では洋
服姿の女性もかなりいた。欧米との違いは一夫多妻制であること、男性は4人の妻を
持つことが出来る。でも実際は2人までという、この場合2人の妻にたいしてはすべ
て平等でなくてははいけない。つまり、お金も愛情も.....。

2 安全になったバス運行、でも一部では.....

7.25ホテルを出発する、直に朝日に輝くカルナック神殿を横に見る。街中にはミ
ニバスが多く走っているが、トヨタのハイエースがとても多かった。それと街角には
あちこちにポリスボックスがあり、銃を持った警官が手持ち無沙汰にしていた。暇な
ことは結構なことだが、こんなに警官がいなくてはいけないのか、そんなに治安が悪
いのか心配になる。しかし、これは観光のほかにはたいした産業もないので、政府の雇
用対策の一つではないかと思われる。そして、市街地を離れるようになるとロバの多

いこと。荷車を引いているロバだけでなく、人が乗ってとことこ移動しているのだ。のんびりした風景とミニバスやトラックが走りまわる姿が混在している、1時間も走ると周りは完全な田園地帯になる。背の高いヤシの木が立ち、日干し煉瓦の家が建ち並び、屋根にはヤシの葉が乗せられていて見た目を悪くしている。でもしばらくすると荒涼とした砂山が続きそこに集落が点々とある。

集落には車が通るような道路は見当たらず、迷路のような小道だけだ。砂漠の端に集落があるわけだが水道は完備されているのかな。でも屋根には衛星放送のパラボラアンテナがたくさん見られる。そんな田舎だが鉄道はカイロからアスワンまでを結んでいる、非電化だが複線だったのは以外な感じがした、そんなに輸送量があるとは思えないのだ。鉄道と並行して走った1.5時間ほどの間に列車は2回しか見なかった、塗装はくすんだような色でホコリまみれだった。

2時間弱でエドフの街へ到着するが、この間には何箇所もの警察のチェックポイントがあった。そして、ここにも必要以上に多くの警察官が詰めている。ガイドの説明によると昔は「コンボイ」という仕組みがあった、それはルクソールからアスワンへ行くバスは勝手に行くことはできず、バスダイヤが組まれて何台ものバスをまとめて警察が護衛して移動したという。安全確保のための処置だったわけで、今でもアスワンからアブシンベルへ行くバスはコンボイによって運行されているようだ。

そんな話を聞くと以前王家の谷であった、機関銃による乱射事件が思い出されちょっと身震いする。

3 保存状態が最も良い「ホルス神殿」

9.20" エドフの街に到着しホルス神殿を見学する、ハヤブサの形をしたホルス神に捧げた神殿で、エジプトで最も保存状態の良い遺跡の一つといわれる。巨大な塔門はカルナック神殿に次ぐ規模で幅79m、高さ36m、そこには王がホルス神とハトホル女神に生贄を捧げている様子が彫られている。入り口の両側には黒い花崗岩でできたハヤブサのホルス神像が立っている。



巨大な塔門



ハヤブサのホルス神像

ガイドのムスタファの説明では、デンデラ神殿との間に2回/年祭りが行われる、これは幸せな結婚の祭りとか。それとこの神殿はプトレマイオス朝時代のもので、紀元前237年から約2世紀かけて完成した。当時は王様が頻繁に変わっていたのでカルトシユの中に王様の名前が刻まれていないという。

塔門をくぐると32本の列柱に囲まれた広い中庭があり、次の第一列柱室の入り口にもハヤブサの形をしたホルス神像が立ち、上下エジプト統一を象徴する二重王冠をかぶっている。ホルスは王の守護者として「偉大な神、二つの国の領主」の称号でたたえられた。列柱室には18本の柱が立つ部屋と、12本の柱が立つ二つの部屋があり、いずれの柱にも素晴らしい神々のレリーフなどが刻まれている。このような作業をして柱を完成させるには、どれだけの時間を費やすことが計り知れず、2世紀かけて完成したというのうなづける。さらにその奥に至聖所があり復元された聖なる舟(本物はパリのルーブル博物館に)が置かれている。でもこの天井はキリスト教徒が火を焚いたことで、すすで黒くなっていた。この建物の外、階段を降りたところにナイル川

の水位を確認するためのナイロメーターが有る。ナイル川の氾濫は脅威であり、常に川の水位を把握していたものだ。

1時間程の見学を終えて10.25"次はコム・オンボへ向かう。

4 ポリスは多いが肝心な所にいない

エドフの街中を走ると観光用の馬車も見られたが、やはり野菜など荷物を運ぶのは口バで白い民族衣装を着た男が乗っていた。そんな風景に見とれているとバスが止まった、何かと見れば羊の親子が道路をのんびり横切っている。そして道路のロータリーにはエジプトらしくオベリスクが建っていた。街中でも信号はないし、交差点などに歩道橋もない。じきに橋を渡る、ここから東岸に戻りコム・オンボさらにアスワンへと向かう。橋から見ると川沿いにのみ緑があって、すぐ向こうは砂漠が広がる景色の中、ゆっくりと観光船が行くのが見えた。

ナイルと砂漠は常にセットになっていることがよく分かる。橋を渡るとラクダを数頭乗せたトラックとすれ違った、ここから1時間弱走ると大渋滞にぶつかった。サトウキビを満載したトラクターが工場に入るため、列を作っていたのだ。片側一車線しかない道路に大きなトラクターが、列をなして並んだので空いた一車線に双方から車が突っ込んで、身動きがとれなくなっていた。今まではたくさんの警察官を見たが、ここには一人もおらず成り行き任せだった。

それでも何とか脱出して11.40"コム・オンボに到着した。

5 ポリスに守られたコム・オンボ神殿

コム・オンボとはアラビア語でオンボスの丘という意味で、現在はサトウキビの生産や工業の盛んな街として活気に満ちている。アスワンハイダム建設によりナセル湖に家が水没した、ヌビア人10万人が移住してきた場所である。

街から4km程離れた丘の上にあるコム・オンボ神殿はトトメス3世が造った建造物の跡地にプトレマイオス6世が建てた神殿。この神殿の特徴は珍しい二重構造になっており、二組6神を祀っている。正面から見ると左右対称で、向かって左がハヤブサの神ホルスに、向かって右はワニの神セベクに捧げられている。



コム・オンボ神殿全景と柱

塔門はほとんど崩れ、列柱は下の部分しか残っていないが非常に美しいレリーフが見られる。われわれは見なかったがワニのミイラも安置されている。そして、ここにも建物の外の広い庭に井戸のようなナイロメーターがあった。その少し先からは雄大なナイルが眺められる、川べりには船着場があり赤いブーゲンビリアが咲き誇り、土産物屋と涼しげな造りの野外レストランもある。丁度そこへ観光船が到着した、そんな川べりには何箇所もポリスボックスがあり、ここでも銃を持った警官が暇をもてあましていた。

6 アスワンハイダムの完成は自然を変えた

12.30" コム・オンボ神殿をあとにしてまずはランチだ、13.00"から川べりのレストランで1時間かけての食事はスープとマカロニグラタンで、スープはおいしかったがグラタンのお味はまずまずといったところ。ビールは550mlが5ドルでちょっとお値打ちだった、この量だと食事前に飲むには妻と二人で丁度良い。ナイル川にはファルーカという白い帆掛け舟が浮かび、砂漠を背景に少しの緑とナイルの青が美しく、中には小舟で釣りをしている人も見える。とても優雅な食事になるところだが、お味はちょっと日本人好みとはいかないのが難点か。食事を終えて14.00"出発してナイル川沿いに30"ほどでアスワンハイダムに到着する、このダムは当時のソビエト連邦の協力を得て建設され現時点で世界第2位の規模を誇る。もともとはアスワンダムが1902年に完成したが、予想をはるかに超える勢いで人口が増えて当初の目的を果たすことができなくなった。そのため1964年に長さ3600m、高さ111m、容積はクフ王のピラミッドの92倍にもなるダムが建設された。1972年にはダムによってできたナセル湖の貯水も完了し、十分な農業用水と電力が確保されるようになった。しかし、毎年起こっていた洪水がなくなり下流域に養分を含んだ土が運ばれず、土地がやせたりナセル湖の蒸発によって生じた雲から雨が降り、遺跡を削り取ってしまうといった問題も起きているようだ。ダムの堰堤に降り立つと、周りは砂漠地帯でそこに忽然と大きな湖が現われて、また砂漠の中にナイルは流れていくのだ。丁度ダムの放水が行われており、ものすごい量の水が放出される様は圧巻である。遠くにハイダム記念塔が見えるが、それ以外はナセル湖と砂漠しか見当たらない。ダムは軍事的機密になっているようで、ここにもポリスが常駐していた。



アスワンハイダムの放水と発電所

7 オベリスクの秘密

アスワンハイダムの次は15.10"切りかけのオベリスクを見学する。アスワン周辺はピラミッドや神殿を造るのに用いた花崗岩の産地である。ここで切り出された石はナイル川を舟で各地に運ばれた。郊外にある石切り場には今でもハトシェプスト女王時代の切りかけのオベリスクが残っている。どんな状態なのだろうと訪れ、その巨大さにただただビックリした。その長さは41.75m、重さ1168tと推定され、完成していれば現存するオベリスクの中では最大のものになるという。しかし、製作中にヒビが入ってしまったため、そのまま放置されたと考えられている。オベリスクは一つの岩から切り出して造る、ま

ず切り出すサイズに溝を作り、そこに木製のクサビを打ち込み、水をかけて木材が膨張する力で亀裂を生じさせたと推測されている。それにしてもどのようにして持ち上げたのか？



切りかけのオベリスク

ファラオだけに許された建造物

オベリスクはピラミッドと同様に頭頂部が四角錐になっており、ヘリオポリスにあった太陽神殿の御神体、ベンベン石に由来する。これらは太陽神ラーの力を表現したもので、雲間から差す光線を模したとされる。ラーはアメンとともに最高神として崇められ、ファラオだけがオベリスクを建てることを許された。王が死後に太陽神となりその力が永遠に注がれるよう、より高く、より太陽の近くに建てられたものらしい。

8 ファルーカの陽気なヌビア人

15.40" 見学を終えてホテルへ向かう、その前にファルーカに乗ってナイルクルージングを味わう。といってもホテルはエレファンティネ島にある、エレファンティネアイランドリゾートモーベンピックと長たらしい名前のホテルなので、舟に乗らざるを得ないのだ。ファルーカにはヌビア人の船頭4人が乗り組んでいて、帆の上げ下げや舵をとる人と役割がある。見た目よりも大きな帆を手際よく張っていくのに感心した、出航して帆走が始まるとリーダーらしき人がダンスを始める。とても陽気なリズムでそのうちにわれわれのメンバーを一人また一人と立たせて、踊りの輪に組み込んでいきとうとう全員踊りの輪に入り手拍子を合わせた。そして、最後には幸せなら手を叩こうを全員で歌い踊り、とても楽しい気分になれた。踊りが終わると商売の時間で、中央の台に手製の民芸品がたくさん並べられた。ネックレスのたぐいからショールのたぐいが多かったが、その中でラクダの骨で作ったペーパーナイフが気に入ったのでお土産に4個買い求めた。



私たちが乗ったファルーカと宿泊したホテル

そして16.30"ホテルに到着部屋は329号室、ナイルを見渡すことが出来る部屋で絶好のロケーションだった。聞けばこのホテルはスーパーアクラスで、今回の旅の中では最高ランクのホテルで添乗員の佐溝さんも始めてという。

18.15"夕食は隣の島でターゲンという魚の入ったグラタンのような料理、でもやはりいまいちなのだ。ここアスワンはアルコールなしのため、名物といわれる「ヌビアジュース」を注文した。イチゴ・マンゴー、グァバーが三段になった生ジュースでとてもおいしかった。お値段も25ポンド(500円)と安くはない。